

死亡率が高く「人喰いバクテリア」と呼ばれている劇症型の溶連菌感染症患者が2015年、8月上旬で既に279人に達し、過去最多だった昨年1年間を上回った。専門家は、生活習慣病などの持病がある高齢者は感染の危険性が高いとして警戒を呼び掛けている。

患者が急増しているのは、劇症型溶血性連鎖球菌感染症だ。手足の壊死や意識障害から死に至る恐れがある。

国立感染症研究所によると、調査を始めた1999～2010年の患者数は多くても年100人前後だったが、2012年以降は毎年200人以上。今年は8月9日までで277人と昨年1年間(273人)を超えた。都道府県別では、東京(44人)、大阪(28人)、神奈川(20人)、千葉、兵庫(各15人)の順に多い。

主な原因となるA群溶連菌は、子どもの咽頭炎やとびひを起こす細菌である。感染者のくしゃみや咳を吸い込んだり、皮膚の傷口が細菌に触れたりして感染すると考えられる。38度を超える発熱や、手足の激しい痛み、腫れといった初期症状から急激に悪化するという、60～70歳代の高齢者に多い。

治療には、抗菌薬による早期治療が必要だが、数日以内の短期間でショック症状に陥ることがあり、2013年には患者203人のうち1割に当たる20人(約9.9%)が死亡した。

持病や過労で免疫力が低下した高齢者は特に、疑われる症状があれば直ちに医療機関を受診することが肝要である。(2015/08/25 読売新聞から)